

地名と街づくり

高見寛孝

一 はじめに

日本民俗学会内において、地名の研究もまた柳田國男によって先鞭が付けられた研究テーマであった。地名に関する論稿をまとめた『地名の研究』は、昭和十一年一月に古今書院から刊行されている。その中には明治四十年代に発表された論稿も多く含まれており、民俗学の草創期から柳田が地名に関心を寄せていたことがわかる。

柳田は、地名に対して「二人以上の人の間に共同に使用せらるゝ符号」^①との定義を与えた上で、比較研究によって地名の命名動機の背後に潜む日本人の心意を明らかにすることを目的とした。^②すなわち、柳田の地名研究は日本人・日本文化の解明を目指したもので、日本民俗学の中核に位置付けられるべきものであった。

こうした柳田の地名研究は、直弟子の千葉徳爾^③や都丸十九一^④に受け継がれた。しかしながら、その後日本民俗学会内で地名研究はほとんど注目されることはなくなった。機関誌『日本民俗学』には、昭和五三年に発表された江端義夫「地形改新にとともなう地名語彙伝承の変容」を最後に、地名に関する論説は掲載されていない。^⑤では、我々民俗学徒にとって地名は価値のない研究対象となってしまうのであろうか。その答えは「否」である。「地方創生」や「持続可能な社会」などとい

った標語が声高に叫ばれている現代社会において、地名研究の価値は高まりこそすれ、色褪せることはないはずである。このことに気付いていた数少ない民俗学者のひとりが谷川健一である。

谷川健一は民俗学者の肩書を持つ研究者ではあるが、柳田國男の愛弟子ではない。その立ち位置は傍系である。しかしながら、柳田の学問に真摯に向き合い、柳田の思想を十二分に理解できている稀有な学者である。その谷川が地名研究の重要性を認識し、川崎市に設立したのが日本地名研究所である。昭和五六年のことであった。現会員数は二百名程度と小規模ながら、日本民俗学会では忘れ去られてしまった地名の研究を継承している唯一の研究機関である。

谷川健一の地名研究をここで論じ尽くすことなどできないが、その基本姿勢は柳田の地名研究を継承している。「地名ほどに息のながい文化遺産はどこにも見当たりません⁶⁾」と、地名の伝承性を認める一方で、「地名は土地との関わりを持つ人間の意識でもある⁷⁾」と述べて、地名の心意性にも注目している。

ところが、こうした地名の伝承性や心意性は無視され、文化遺産である地名が次々と消されていった。その要因は、明治維新以後繰り返し実施されてきた町村合併であり、それに伴って複雑化してしまった大字小字関係を簡略化して合理的な住居表示にするために制定された「住居表示に関する法律」（昭和三十七年施行、通称「住居表示法」）であった。

こうした動きに対して危機感を抱き、地名の研究と保存に取り組んできたのが谷川健一だった。柳田國男は奇しくも昭和三十七年に亡くなっているのに、「住居表示法」に対する意見は何も語ってはいないが、存命であればおそらく谷川と行動を共にしていたはずである。

「住居表示法」では、従来使用されていた地名の大字・小字を簡略化する住居の表示方法として街区方式と道路方式のふたつが採用された。いずれの方式においても、長い歴史を有する地名に替えて数字を用いて住居の所在場所が表示されるようになったのである。数字を用いた住居表示の方が合理的であったため、大字や小字として用いられていた地名は日常生活の中で使われなくなり、次第に忘れ去られていった。

一定範囲の土地を特定するのが地名の役割であるのだから、数字でもその役割を果たすことはできる。しかし数字は単なる記号であって、地名のようにその土地に刻まれた歴史やその土地の地形を表示するものではない。地名が土地と結び付いた固有性を有するのに対し、数字は任意的なものでしかないのである。

さらに「住居表示法」による影響は大字・小字のレベルに留まるものではなかった。昭和三八年七月、自治省は「街区方式による住居表示の実施基準」（告示第一一七号）を示し、街区方式によって町の区域が従来と変更になった場合、「新しく町を設け又は町の名称を変更する」ことを求め、「町の名称の決め方」として三つの基準を掲げた。その第一項に「できるだけ従来の町の名称（当該地域における歴史、伝統、文化の上で由緒ある名称を含む。）に準拠して定めることを基本とすること」と指針を示したが、実際には丘でもない土地に「希望ヶ丘」だとか「光が丘」と付けたり、東西南北を付して区域を分割するだけの無味乾燥な名称も少なくなかった。そうした地名Ⅱ町名には、従来の地名が有していた歴史性や地形的特徴などは反映されていない。

もちろん、そうした新しい地名が一概に否定されるべきではない。問題なのは、その土地に暮らす人々が地名に愛着を感じ、その土地を「ふるさと」として認識し、その土地に住み続けようと思えるのかどうかである。街づくりはここから始まる。つまり、地名は街づくりにおける基本的要素のひとつと考えることができる。

これから地名と街づくりとの関係について、柳田國男と不動産会社山万（以下、山万と略す）の実践を通して考えてみることにするが、その前に柳田の歴史観を確認しておく必要がある。

柳田は国の歴史を永遠と捉えた上で、「予め未だ生まれて来ぬ数千億万人の利益をも考えねばなりません。況や我々は既に土に帰したる数千億万の同胞を持つて居りまして、其精霊も亦国運発展の事業の上に無限の利害の感を抱いて居るのです。」と述べ、国づくりには未来人ばかりでなく、すでに死亡してしまっている過去人の思いも汲み取らなければならないとしている。死者の思いをも反映させた国づくりを説く柳田に対し、まわりの者たちは変人扱いをしたそうであるが、

現代人を基軸に過去人と未来人とを繋ぎ合わせようとする柳田の歴史観は、現代の言葉にパラフレーズするならば「持続可能な社会の構築」となる。

現代社会に生きている我々も、いずれは死を迎えて過去人となる。未だ生まれていない未来人もやがて現代人となり、そして過去人となる。現代人である我々の意志が未来人によって無視されたり、無闇に踏み躪られるのであれば、どうして情熱を注いで街づくりなどできようか。我々の努力が未来人によって多少とも継承されると信じるからこそ、国づくりや街づくりに取り組むことができるのである。歴史を時代毎に区切ってしまうのではなく、ひとつの連続体として捉える柳田の歴史観こそは、「持続可能な社会の構築」にとって必要不可欠なものであり、柳田の街づくりもこうした歴史観に立脚している。

二 柳田國男の街づくり

(一) 柳田國男ゆかりサミット

柳田國男の民俗学を街づくりに活かしたいとの思いから、柳田ゆかりの市区町村が持ち回りで開催地となり、毎年シンポジウムを開催していた。それが柳田國男ゆかりサミットである。ゆかりの市区町村は北から、岩手県遠野市・長野県飯田市・茨城県利根町・千葉県我孫子市・東京都世田谷区・愛知県渥美町・兵庫県福崎町・宮崎県椎葉村・沖縄県平良市（現宮古島市）の九つの自治体。残念ながら設立の仕掛人であった後藤総一郎氏（明治大学教授）が平成十五年に逝去してしまつたため、現在では休眠状態にあるようだ。

柳田國男ゆかりサミットの成果については高木繁吉の論稿^⑨、参加自治体が刊行している報告書^⑩などに紹介されている。平成六年、世田谷区がサミット開催地となった時、筆者は企画展と記念誌作成を担当した。その時の記念誌が『柳田國男と世田谷―柳田國男のふるさと観を中心に』である。

同誌の中で筆者は、柳田國男の街づくりを取り上げて紹介した。それは柳田のふるさと観に裏打ちされた街づくりで、それまで誰も論じたことのないテーマであった。しかし同誌は非売品で、関係者のみに配布されているため、一般の人が読むことは難しい。そこで、同誌で取り上げた「地名と街づくり」に関係する箇所をここで紹介することとする。

(二) 柳田國男の世田谷への移住

柳田國男が牛込区市谷加賀町（現新宿区）から北多摩郡砧村喜多見（現世田谷区成城町）に移住したのは、昭和二年九月のことであった。かねてから自分の貯金を使って建築中であつた書齋「喜談書屋」が完成したため、長男為正氏を連れて養家から引越して来たのである。養家には養父母と妻、そして四人の娘が残されることとなつた。

移住の表向きの理由は、為正氏が通つていた成城学園が喜多見へ移転したことによる通学の不便を解消するためであつた。しかし、為正氏によればそれは「ウソ」であつた。当時柳田は、しばしば仲間を養家に集めて研究会を開いていた。婿養子の立場としては、養父母に対して相当気兼ねをしていたらしい。思う存分研究活動をするため、自分の家が欲しかったのである。

柳田が移り住んだ頃、喜多見にはまだ江戸時代の農村風景が残つていた。その頃の様子を次のように語っている。「私達がかこへ越して来た時分は、学校の区域内も区域外も大抵櫟林で、この辺から方々へ薪や炭を出して居ました。私の家の地所も櫟林でした。前の道路は昔からあつた道で、それより向う（成城北側）にはたった一軒しか家がありませんでした。（中略）その頃はこの辺にキツネが居たと云う話も聞いて居ますが、私は一度も見た事がありません。雲雀は大変澤山いて、春など二階の窓を明けて寝て居ると、雲雀の声が随分よく聞こえました。この辺は色々武蔵野の名残があり、草花にも珍しいものが多く、散歩はとても楽しいものでした。⁽¹⁾」

自然の中で人々の生活が営まれていた武蔵野の面影が目に見えるようである。そうした近代以前の暮らしの中では、人と動物との交流を語るエピソードも数多く伝えられている。ある婦人は「ブリキ屋さんが仕事で烏山にゆき、夜になつての帰

り道、狐に化かされ、どうしても成城へ帰れずに朝になって田圃の中に寝ていたとか、又月の明るい冬の夜、テンテレツクテンテンと祭囃がはつきり聞こえ、その方角へ近づくとまた別の方向に聞えるとか」などといった話を伝えている。柳田もまた「ある晩大工の某が、近くの稲荷さんのほと리를通っていると、狐が踊っていて、しきりに『あいつ、今夜は遅いな』と語り合っていた。やがて遅刻して到着したのは、大工の家の飼ひ猫で『今夜はおカユが熱くって』といいわけをしなから、いっしょになって踊っていた。大工が帰宅してみると、成程その夜は冬至か何かで、各戸ともおカユを炊く日であった」という世間話を紹介している。

こうした人間と動物（自然）との交流を伝える話が人々の日常会話の中で語られるのは、人間が自然と同居して暮らしていたからであり、住民同士が価値観を共有できていたからである。柳田國男が住み始めた当時の喜多見は、まさにそのような街であった。

地名に因んで書齋に「喜談書屋」と名付けたのも、柳田が喜多見を大変気に入っていたからである。実際に喜多見が柳田の終の棲家となっている。ところが、喜多見の含まれる砧村が世田谷区の一部と成り、東京都に編入されると、次第に外部からの居住者が増え始め、武蔵野の原野や田畑は宅地化され、農村風景は高級住宅地へと変貌してしまう。失われたのは自然ばかりではなかった。住民たちの交流も希薄となり、柳田は一抹の淋しさを抱き始める。

(三) 柳田國男のふるさと観

柳田國男（明治八年～昭和三七年）の生まれ故郷は兵庫県神東郡田原村辻川であった。現在の地名表示では兵庫県神崎郡福崎町辻川となる。本来であれば福崎町が柳田のふるさとになるはずであったのだが、そこで暮らしたのは僅かに九歳までで、経済的に困窮していた実家（松岡家）は明治十七年に母の郷里加西郡北条町（現加西市北条町）に転居する。高等小学校を卒業した十一歳の年、柳田はひとりだけ辻川に戻され、父親と懇意にしていた三木家の食客となった。

十三歳になると、今度は茨城県北相馬郡布川村（現利根町）に転居する。開業医となった長兄鼎の許に預けられたのであ

る。明治二十年のことであつた。利根川のほとりでのんびりと暮らしたのもわずかに三年間で、明治二三年には進学準備のため下谷区徒士町（現台東区）の次兄井上通泰の家に寄宿することとなつた。明治三十年に東京帝国大学法科大学に入学してからは、次兄の家を出て一人暮らしをするようになる。その後明治三四年に柳田家の養嗣子として入籍し、市谷加賀町（現新宿区）での新婚生活が始まる。昭和二年に砧村喜多見へ移住するまでの二六年間、柳田の生活拠点は市谷加賀町であつた。そこから役所へ通勤し、そこで五人の子供が生まれているのであるから、柳田にとつて市谷加賀町が第二の故郷として認識されてもおかしうはなかつた。しかし、市谷加賀町は柳田にとつてひとつの通過点でしかなかつたのである。

昭和二年からこの世を去る昭和三七年まで、人生の中でもっとも長い歳月を過ごした世田谷区喜多見が柳田にとつてふるさととなつた。それは結果としてではなく、移住当初から柳田は喜多見をふるさととして認識するようになっていた。

長男が通つていた成城学園の移転に伴い、偶然に喜多見で暮らし始めた柳田ではあるのだが、柳田はその偶然を必然として捉えようとする。それを示す文章が残されている。移住後三年ほど過ぎた昭和五年五月に書いた「旅と故郷」の一節である。「私などもまだ学生の時に、どこかこの高台のはずれに来て、晴れたる川の水煙を眺めたことがある。或はくぬぎ原の暖い草地に寝ころんで、年とつてからどこに行つて住むだろうかを、考えて見たこともあつた。その林の間には、めつたに人の通らない細路があつた。それがちょうど今の家の、庭のあたりであつた様な気がして仕方がない。」⁽¹⁴⁾

昭和十五年十一月の別の文章では「私は昭和二年の秋、この喜多見の山野のくぬぎ原に、僅かな庭をもつ書齋を建て、こゝを一茶の言うついの住みかにしようという氣になつた」⁽¹⁵⁾と書き、喜多見を永住の地にしようと考えているようになっていたことを示している。

その一方で、生まれ故郷の辻川に対しては次第に親しみが薄らいでいく。その心情を「故郷とはいえ、肉親は誰もおらず、旧知の三木家にばかり世話になるので、故郷というものゝ印象が十分變つて来た。遊ぶ仲間の子供達との因縁、その子供らのお母さんやお祖母さん、それから近所の人、親類の者などとの心の繋がりが、何となく疎くなってゆくような氣がした。

はじめ帰った時、声をかけてくれた人たちまでが、だんだん遠のいて行くようで、やがてすっかり他所行きの感じになってしまった^⑬」と吐露している。

おそらく柳田にしてみれば、柳田が故郷を離れたのではなく、故郷の方が柳田から遠ざかって行ってしまったのである。離郷した者が抱く共通の感慨なのであろう。現代人のふるさと観を分析した坪井洋文は、次のような三つの型を抽出した^⑭。

A型 村や町に定住して生活する者たちが、その生活圏を故郷と認識するものである。

B型 生まれ育った村や町から離れて移住し、新しい土地に定住した者が認識する故郷で、距離的に離れた生まれ故郷ということになる。そこに生活感覚をともした人間がいる限りは、実体としての故郷でありうるが、その人びとがいなくなれば抽象化された故郷でしかなくなる。

C型 新しい移住地に定住を志した人たちによって、その移住先が次世代の者たちに認識される故郷となる場合である。

この中で、柳田國男が移住地喜多見に抱いたふるさと観はC型である。自分ばかりではなく、子や孫たちも暮らし続けていくことを想定した未来志向型のふるさと観といえることができる。

(四)柳田國男の植樹

偶然住み着いた喜多見の地に愛着を感じ始めた柳田國男。喜多見は鎌倉時代の史料に見えている地名で、古くは木多見や北見などと表記されていたのだが、次第に好字の喜多見が用いられるようになる。近世期には江戸氏の血筋を引く喜多見氏の領地で、その陣屋跡も残されている。明治時代を迎えると、市制・町村制実施に伴い、近隣の宇奈根村・大蔵村・岡本村・鎌田村とともに近代行政村砧村の大字となった喜多見は、その中心的集落として村役場も置かれていた。砧は布を打つ木槌のことで、その様子は『万葉集』巻十四に収められた「多摩川に晒す手作さらさらに何ぞこの子のここだかなしき」に詠われている。多摩川に近いことから、この歌と縁の深い砧が新しい村名として採用されたとされている。

こうした歴史を踏まえた上で、柳田は喜多見をふるさとと認識するようになるのである。そのひとつの表れが語源につい

ての考察である。柳田はキタミの語源を沖縄の神祭りに登場する「クダミ石」から推測して、神送迎に関わる神聖な石であったとしている。ただし、このキタミ語源説を支持できる証拠は、現在までのところ確認できていない。⁽¹⁸⁾

喜多見や宇奈根など砧村成立に参加した五カ村は、それぞれに藩政村としての長い歴史を有し、ひとつの共同体として別々に日常生活を営んできた。明治以前は、用水利用などにおいて利害関係にあった村同士でもあった。こうした事情について柳田は次のように説明している。「都邑には異郷人充満し、其の間には聯絡も無く、又節制も無かつた故に所謂生き馬の眼をも抜こうとする者があり、又人を見たら泥棒と思わなければならなかつた。交通と雑居が盛んになって、田舎も少しづつ是にかぶれて来たが、其中でも新たな破綻の目についていたのは、従来御互いに他所者であつた数個の村が、一つに纏まって自治体を作る場合であつた。この新町村内の道義は、弛んだのでは無くてまだ発達しないのである。」⁽¹⁹⁾

砧村も「従来御互いに他所者であつた数個の村」によって成立した自治体であつた。さらに、他地域からも多くの新住民が移住して来ている。まだ発達していない「道義」を、どのようにしたら発達させることができるのか。つまり、街づくりのために何をすればよいのか。柳田が実践したのは植樹であつた。信濃小柿から始まり、杏そして梅と、次々と自費で苗木を取り寄せては近隣の家々に配り歩いた。それは新しい村の風景を創り出すためであり、他所者であつた人々の交流を芽生えさせるためでもあつた。「山川草木の清く明かなるものは、太古以来悉く皆、我々の味方では無かつたか。人を幸福ならしめずに終わる筈が無い」⁽²⁰⁾と柳田は言う。これこそが、柳田が樹木に託したふるさと創生への願いであつた。

柳田が植えた樹々は大きく育ち、成城の街に根付いている。若き頃の大江健三郎が書生をしていたという長岡家では、道行く人々が花を愛でながら散策できるようにと柳田の贈った杏の樹が今でも可憐な花を咲かせている。作家中河与一は「終戦の頃、梅の木を成城の町のどの家にも植えて垣の外からも見えるようにしたらどうだろうという提案をせられたことがあつた。人の心を慰める気持ちが御ありになつたのかと思う」⁽²¹⁾と、当時の様子を伝えている。その梅の樹の一本が、画家伊原宇三郎家に残されている。⁽²²⁾

(五)世田谷区の街づくり

世田谷区が誕生するのは昭和七年のことである。東京府荏原郡に属していた世田ヶ谷町・駒沢町・松沢村・玉川村の二町二村が合併して世田谷区となった。それから四年後の昭和十一年には、北多摩郡に属していた千歳村と砧村が新たに加わり、現在の世田谷区域が確定している。セタガヤの語源としては、低湿地が狭くなった区域を指すセト↓セタだとする説が有力である。⁽²³⁾

区の名前の元になっている世田ヶ谷町は、藩政村であった世田ヶ谷村と下北沢村・代田村・池尻村・三宿村・太子堂村・若林村・経堂在家村の八つの村々が明治二二年に合併して成立した近代行政村である。同じように、駒澤町などにも多くの藩政村が含まれていた。その数は世田谷区全体で四二ヶ村を数える。江戸時代の支配形態としては、大名（彦根藩）領の他、幕府直轄領、旗本領、寺社領とに分かれていた。いわば寄合所帯としての集合体であった。世田谷はその中のひとつの地名に過ぎない。もちろん、そうした状況は世田谷区に限ったことではなかった。多くの市区町村が負わねばならなかった歴史である。

では、そうした寄合所帯を、ひとつの共同体としての街にするためにはどうすればよいのか。世田谷区の取り組みを見ておこう。昭和五三年、世田谷区では高度経済成長の中で失われた人間性や美しい環境を取り戻すため、区民参加を計りながら区民共通の区の将来像を見い出すべく、四つの内容から成る基本構想をまとめた。⁽²⁴⁾「美しい緑におおわれた安全でゆたかな生活環境のまち／充実した福祉と安定した地域経済生活のいとなめるまち／すぐれた教育と香り高い文化を享受できるまち／区民の交流によるいきいきとしたコミュニティのあるまち」

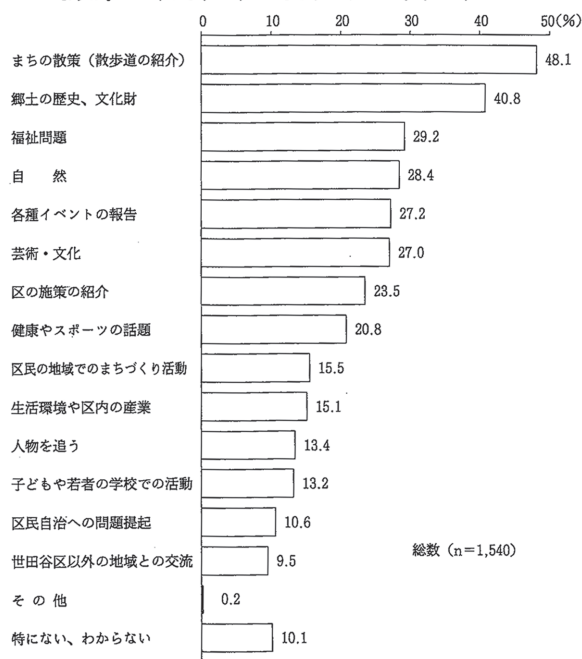
これら四つの項目に示されている世田谷区民共通の区の将来像を実現するために、「ふるさと区民祭り」を始めとする様々な祭りが開催されている。それらの祭りは、いずれも世田谷区と地域住民による共同開催で、区民交流の場としての役割を果たしている。世田谷区がこうした祭りを開催しているのは、「ふるさととは遠くにあるものではなく、身近なところにつく

るといふ発想に立ち、区では特色のある地域まつりを通して、ふるさと意識の高揚とふれあいの場（機会）づくりを図る⁽²⁵⁾ことを目的としているからである。こうしたふるさと創りに対する世田谷区の姿勢は、「ふるさととは地域住民の手によって創られるべきであり、その過程の中でこそ住民の間にふるさと意識が芽生える」とする柳田國男の思想を受け継ぐものといえよう。

世田谷区では、独自制作番組「風は世田谷」⁽²⁶⁾の内容として区民がどのような放送を希望するのか調査したことがある。その結果、「まちの散策（散歩道の紹介）」の紹介四八・一％と「郷土の歴史、文化財」の四〇・八％が他を引き離して圧倒的に多いことが判明した。この結果が何を意味しているのかといえ、区民の多くが世田谷区がどのような街であるのか知りたいと望んでおり、世田谷区をふるさととして捉えようとする区民の意識の表れと見ることができるといえる。

すなわち、「まちの散策（散歩道の紹介）」は世田谷の風景を知ることによって空間的な広がりの中に自分自身を見出しそうとする意識であり、「郷土の歴史、文化財」は時間の流れの中に自分と世田谷区とをつなぎ合わせようとする意識の表象であろう。風景と歴史の両面から自分と地域とを結び合わせる中でふるさと意識が芽生えるのであり、そこから街づくりが始まるのである。

『風は世田谷』に対する番組内容への要望
世田谷区を紹介する番組として、あなたはどんな内容のものがよいと思いますか。この中から、いくつでもあげてください。(M.A.)



三 ユーカリが丘の街づくり

(一) ユーカリが丘の誕生

千葉県の中央からやや北に位置する佐倉市は、近世期に佐倉藩の城下町として栄えた街である。その佐倉市の北西部、印旛沼と八千代市に接して「ユーカリが丘」と名付けられた一帯が広がっている。現在、ユーカリが丘一丁目～七丁目、西ユーカリが丘一丁目～七丁目、南ユーカリが丘一～三五がある。

ユーカリはコアラの大好物な植物として知られている。原産地はオーストラリアで、明治初期に日本へ伝えられ、温暖な地域で育っているとのことであるが、日常生活の中で目にすることはほとんどない。その外国産であるユーカリを地名として採用したのは、「街づくり企業」のキャッチフレーズを冠する山万であった。その経緯について、当事者である嶋田哲夫氏は次のように説明している。⁽²⁷⁾

元々山万は繊維製品を取り扱う問屋であった。創業は昭和二六年である。ある年、取引先の縫製業者が倒産し、その担保として受け取ったのが二万八千坪の広大な山林であった。その山林は横須賀市南部（現在の横須賀市ハイランド）に所在しており、嶋田氏が山頂から眺めて見たところ、相模湾と東京湾の両方を見渡すことのできる絶好のロケーションにあることがわかった。嶋田氏は宅地開発し、分譲住宅地として売り出すことを思い付き、さっそく実行に移した。それが湘南ハイランドである。昭和四十年三月に開発着手し、三年後の昭和四三年一月に販売を開始している。

湘南ハイランドの成功に自信を持った嶋田氏は、「繊維はワンシーズンで流行が終わってしまうし、また流行に当たるかどうかの確立も半々です。これに比べて不動産は、自分達の商品や仕事を形として永久に残せることが何よりも魅力的でした」と、繊維業から不動産業への転身を決めた。しかし、湘南ハイランドでの事業にすべて満足したわけではなかった。

従来の「造って売るだけ」の「分譲撤退型」不動産業ではなく、分譲地全体の街の将来を住民とともに考える「成長管理

型」不動産業を目指した嶋田氏は、その夢を叶えてくれる土地を探すことになる。それがユーカリが丘であった。ユーカリが丘の地は千葉県の飲料水を供給する印旛沼に近いことから、乱開発されることはないだろうと確信した嶋田氏は、「自然と都市機能が調和した二一世紀の新環境都市」を開発コンセプトに掲げて事業を開始する。昭和四十六年五月のことであったが、用地買収は思うようには進まない。開発計画に理解を示してくれない五百戸の農家を、嶋田氏自ら戸別訪問し、すべての用地買収が完了するまでに四年の歳月を費やしている。

昭和五十一年に開発申請し、翌年七月に開発許可が降りて工事が始められ、第一回目の分譲地販売が行われている。その後昭和六二年、平成十四年、平成二十年と開発事業は続けられ、街の北西部に位置する「ユーカリが丘福祉の街」を合わせた総開発面積は、東京ドーム五二個分に相当する二四五ヘクタールという広大な街が誕生している。総計画戸数は八千四百戸、総計画人口は三万人というから、まさにひとつの地方自治体の規模を有する街なのである。

(二)ユーカリが丘の歴史

我々日本人にとってはあまり馴染みのない樹木であるユーカリを街の名前、つまり地名として採用したのは何故であろうか。このことについては、山万発行の広報誌『夢百科』（第十号第二版、二〇一六年）に次のような説明が付されている。「環境破壊とは無縁の佐倉の豊かな自然を活かして『自然と都市機能が調和した二一世紀の新・環境都市』を創ろうと決意し、街の名前も開発テーマを象徴するものにと決めました。そこで、空気の清浄や殺菌作用があり、時には樹高百メートル近い大木にもなるというユーカリの木に着目、佐倉のきれいな空気と豊かな水がユーカリの木のようにこの街を大きく育んでくれるよう願いを込めて『ユーカリが丘』と名付けました。」

この説明文から分かる通り、山万ではユーカリという樹木を街の成長を象徴する存在として捉えているのである。この点は、新たに誕生した成城という街の発展を願い、杏や梅の樹などを植樹した柳田國男の思想に相通じている。もちろん、山万の関係者が柳田國男の影響を受けていることはないであろう。

その成城もユーカーが丘と同じく、新しく名付けられた地名である。大正十一年（一九二二）に東京牛込区に開校した成城第二中学校が、三年後の大正十四年に北多摩郡砧村喜多見に移された。それに伴って喜多見の一部が成城と呼ばれるようになる。

喜多見も、そして区の名称として採用された世田谷も中世以来の歴史を有する古い地名である。当然のことながら、そこに住んでいた住民たちによって名付けられた地名である。同じように、ユーカーが丘が誕生する以前、そこには別な地名があり、連綿として受け継がれてきた歴史があった。角川書店刊『千葉県地名大辞典』を用いて、ユーカーが丘の歴史を振り返ってみよう。ユーカーが丘以前、その一帯は志津村と呼ばれていた。志津村は明治二二年に成立した近代行政村である。市制・町村制施行に伴い、江戸時代以来存続していた井野町・下志津村・上志津村・青菅村・小竹村・上座村・先崎村・井野村の七カ村と内黒田村飛地字今宿が合併することによって成立している。これらの村々は、いずれも近世期初頭の検地に伴う村切によって生まれた年貢供出単位としての藩政村である。用水権や山野入会権など、互いに利害関係のあった村同士であった。このことは近代行政村間でも同じで、嶋田氏が「佐倉市の旧市街の人たちからすると、旧志津村にあるユーカーが丘はいまだに『合併してやった農村』⁽²⁸⁾なわけです」との発言に象徴されている。

旧志津村の内、大字小竹がユーカーが丘一丁目と五丁目に、大字上座がユーカーが丘一丁目〱四丁目と六丁目に、そして大字井野がユーカーが丘二丁目〱四丁目と六丁目〱七丁目になっている。⁽²⁹⁾地名が変更されたからといって、それまでの歴史がすべて失われてしまうわけではない。産土社である四社大神や熊野神社、八社大神は今もそのまま残されている。

ユーカーが丘が成立する以前、いくつもの村が存在し、多くの人々の暮らしが営まれていた。それぞれ村の社を抛り所として歴史を刻んできたのである。柳田國男の言葉を借りれば、ユーカーが丘も「従来御互いに他所者であった」のである。さらにいえば、他地域から移り住んで来た新住民と古くから何世代にも渡って住んでいる旧住民たちとの利害も考えねばならない。

(三)ふるさととしてのユーカーが丘

そうしたいくつもの村々をひとつの街としてまとめ上げるため、ユーカーが丘ではどのような取り組みが行われているのであろうか。「誰もが安心して住み続けることができる街」を創造するため、山万が実践している取り組みのいくつかを『夢百科』の中から紹介してみよう。

(a)住民参加の街づくり

宅地を造成し、住宅を建設して売ったままでは街が衰退してしまうのではないかとの危惧を抱き、山万は販売後も街づくりに積極的に参加する姿勢を貫いている。その重要な点は、山万が一方的に施策を実施するのではなく、住民たちに街づくりへの参加を促していることである。住民・行政・山万の三位一体での取り組みが山万の提唱する街づくりの基本姿勢である。

住みよい街とは、結局のところそこに暮らす住民たちによって決定されるのである。住民が街づくりの主体となるべきとする思想は、柳田國男の唱える創造主義民衆史観に通底するものである⁽³⁰⁾。柳田が偶然移り住んだ喜多見や成城の街に愛着を覚え、ふるさととして認識し、街づくりのために植樹を行ったのは民俗学者としてではなく、ひとりの住民としての実践⁽³¹⁾であった。

柳田は言っている。「我々の歴史がこれから出来ようとする心持、それが共に住む者の感覚以外には、跡を遺さぬだろうという心持が、故郷というものゝ本の味では無かったか⁽³²⁾。」と。柳田独特の難解な表現ではあるが、ふるさとというのはその街に住み続けようとする住民たちが創り上げていかなければならないものであり、その街をふるさとと感ずることのできるのは、その街の住民たち以外にはいないという意味である。

ここに表象されたふるさと観は、自分が生まれた土地を指す過去志向のふるさと観ではなく、自分の子や孫が住み続ける土地を指す未来志向のふるさと観である。驚いたことに、山万もまた「街には、住む人のかげがえのない人生と、その家族

やまだ見ぬ子孫の人生までもが委ねられている」と謳っており、未来志向の街づくりを目指している。³³⁾

ただし、注意しておかなければならない点は、柳田の歴史観を分析した折に示した通り、柳田は歴史を区切られたものとしてではなく、過去―現在―未来の連続体として捉えようとする。その上でこれからの国づくりに死去した過去の人の思いも汲み取らねばならぬと主張しているのだが、どのようにすればそれが可能であるのか。柳田が見い出した方法が、伝承文化である民俗を調査研究する民俗学であった。地名もまた民俗のひとつである。ユーカーが丘という地名に命名者の思いが込められているように、旧村名である志津や井野・小竹・上座などの地名にも過去人の土地（村）に対する思いが込められているのである。その思いをユーカーが丘の現在人がどのように継承していくのか。地名研究は街づくりの出発点といっても過言ではない。

(b) 祭りの開催

街づくりとは、畢竟ふるさとづくりに他ならない。自分たちばかりではなく、子や孫のためによりよい街づくりが求められている。街に愛着のない者に、街づくりなどできるはずもないし、そうした意識さえ芽生えることはないであろう。

街づくりを実践していく上で重要な点は、住民が自分たちの住む街をふるさとと認識し、住民同士が連帯意識を持つことである。住民のアイデンティティーを醸成することも地名の持つ役割のひとつであろうが、祭りもまた住民の連帯意識を生み出す仕掛け（文化）である。

江戸時代以来様々な共同体として続いて来た四二カ村が合併して成立した世田谷区では、「ふるさと区民まつり」を始めとする多くの祭りを開催している。それは「ふるさととは遠くにあるものではなく、身近なところで作るという発想」からであったのだが、熊本県熊本市郊外の新興住宅街である帯山地区でも、各町内の小学校区子供会役員の発案によって、昭和五年に地藏堂が建立され、地藏祭りが行われるようになっていく。「帯山地区をふるさととして育った子供達にふるさとの想い出を与えたい」との願いに基づくものである。調査者の牛島史彦氏は「ここを永の住いとして根をおろそうとしてい

る新住民達の思い入れとでもいったものであろう。彼等の後にした本物のふるさとでは様々の民俗が行われていた。ふるさと像は、具体的な民俗の思い出を通して浮び上つて来るものであり、その代表の一つが地蔵祭りであったのだが、彼等は逆に『地蔵祭り』と自ら命名した催しを演出する事によつて新天地を『ふるさと』⁽³⁴⁾ と思い込もうとしているのかもしれない」と分析している。

以上の二地域の事例から、祭りが地域住民の絆を強める民俗と見なされていることを知ることができよう。そのような動きと呼応するかにように、ユーカリが丘でも昭和五八年から「ユーカリまつり」が開催されるようになっていた。第一回目の入居が開始された昭和五五年から、わずかに三年後のことである。その経緯については「昭和五八年の初夏、既に自治会等の住民組織が結成されていたユーカリが丘一丁目、二丁目、五丁目の自治会役員間で、ユーカリが丘地域のコミュニティづくりの一環で『新たなふるさとづくりにつながる夏祭り』の開催プランが持ち上がったことが始まりです。」と説明されている。

(c) 農村風景との共存

ユーカリが丘の生みの親である嶋田哲夫氏は、福井県の農家で育ったことから、農村には親しみを抱いていた。そのことが遠因と思われるが、元々農村地帯であった旧志津村の一部がそのまま農業地区として残されている。

ユーカリが丘の街の中心部には、全長四・一kmの鉄道「ユーカリが丘線」が走っている。全部で六つの駅の中で三つ目の公園駅からは環状線となっていて、その内側が農村地帯のまま残されているのである。どうして宅地化して売り出さなかったのかということに関しては、「じつはあそこに旧村がありましてね。もう純粋な農家ばかり。それで、まあ、あそこは農業をやるしかないだろう」と、嶋田氏は説明している。嶋田氏が意識していたのかどうかは分からないが、ふるさととしての街づくりには、世田谷区民の意識調査が示しているように、空間軸（風景）と時間軸（歴史）の両面から自己と街とを結び合わせる必要がある。そのため世田谷区では、江戸の近郊農村として発達してきた歴史を顧みて、江戸時代の農家を

移築し、田んぼや農業用水を復元した次大夫堀公園民家園をオープンさせている。

昭和五五年一月から東京新聞川崎版で連載が開始された「ふるさと再発見」において、川崎市民が語った「ふるさと像」の半数は「古いお寺や神社に残る史跡、伝説や民話で占められ、そのほかは緑豊かな森林や丘などの、里の自然、保存継承されている民俗芸能、村の風景³⁵」であつたというから、世田谷区民のふるさと意識が特別なものではないことが分かる。おそらくユーカリが丘住民を含めて、日本人に共有されたふるさと意識であろう。この意味において、嶋田氏はユーカリが丘住民のふるさと意識を先取りしていたといつてよい。

四 おわりに

柳田が偶然住み着いた喜多見は江戸時代以来続いて来た村で、その地名としての起源は中世まで遡ることができる。明治二二年、喜多見を含む六つの村が合併して近代行政村としての砧村が成立する。砧村はこの時に名付けられた村名であり、地名である。新たにひとつの村として誕生した砧村に対して、柳田は未来志向のふるさと観を抱き、名実ともにひとつの共同体となるように植樹を行った。樹木を媒介にして、元々他所者であつた村人同士が心を通わせることができるであろうとの願いからである。

柳田自身だけでなく、子供や孫たちも住み続ける街として認識した時、初めてふるさと意識が芽生え、よりよい街づくりへと向かうのである。その時ふるさと意識を支えるのが街の風景と歴史であつた。自分自身を街の風景や歴史の中に位置付けようとするのである。このことは世田谷区民や川崎市民の意識調査によって明らかである。

街の風景や歴史を背景に名付けられているのが地名に他ならない。地名は他の土地と区別するため、その土地の地形的特徴や歴史的事跡に基づいて名付けられているため、地名を研究することによってその街の失われた風景や歴史を知ることが

できる。街全体を代表する地名（街の名）ばかりでなく、その中に含まれる多くの字名を研究することで、今まで知られていなかったその街の歴史が明らかとなるであろう。

街づくりはふるさと意識を持った住民たちによって行われなければならない。もちろんひとりだけでできるはずなどないから、より多くの住民が主体的に参加することが望まれる。柳田國男の説く国民ひとりひとりが歴史創造の主体者となるべきだとする創造主義民衆史観はまさにこのことを指している。

この創造主義民衆史観の立場から、街づくりに取り組んでいるのが山万である。ユーカリが丘という聞き慣れない、風変わりな地名は街の発展を願って付けられている。その望みが叶えられるのかどうかは、山万のみならず地域住民の街づくり参加への姿勢にかかっている。自分達の住む街を子や孫の世代に受け継いでもらうためには、よりよい街にしなければならない。ここに未来志向のふるさと観が必要とされるわけであるが、かといって過去を切り捨ててしまつてはならない。なぜなら、歴史は過去から未来へと続く連続体であるからだ。

自分たちのふるさととなる土地がどのような歴史を刻んで来たのかを知る方法はいくつもある。地名の研究はそのひとつである。ユーカリが丘以前には旧志津村があり、その内部にもまた江戸時代以来の歴史を有する小竹村、上座村、井野村があり、さらにそれぞれ無数の字名を有している。どの地名も人々の生活の中で生まれ、そして伝承されてきた。ユーカリが丘以前の生活史が刻まれている。

これから二百年後、三百年後のユーカリが丘住民たちが街の名前に誇りを持ち、ふるさととして住み続けるためにも、ユーカリが丘以前の歴史を明らかにすることが望まれる。地名の研究がその一翼を担うことであろう。

末筆となつてしまつたが、山万株式会社企画部の井口安由美様には資料の紹介など、色々とお世話いただいた。心より御礼申し上げます。

註

柳田國男の著作からの引用は、特に断りのない限り『定本柳田國男集』（筑摩書房刊）に拠る。引用に際しては、仮名遣いや漢字の一部を適宜改めた。

- (1) 柳田國男「地名の研究」（定本八巻） 八ページ
 - (2) 同右 五ページ、三二ページ、四七ページ
 - (3) 柳田國男「東国古道記」（定本二巻） 二三六ページ
千葉徳爾『新・地名の研究』古今書院 一九九四年
『地名の民俗誌』古今書院 一九九九年
 - (4) 都丸九一「地名研究入門」三一書房 一九九五年
 - (5) 地名に関連付けた研究としては長野隆之の論稿がある。
長野隆之『「渋谷」における地名認識の重層性』『都市民俗研究』八二〇〇二年
 - (6) 谷川健一編著『現代「地名」考』日本放送出版協会 一九七九年 十ページ
 - (7) 谷川健一「日本の伝統と地名」谷川編『地名と風土―日本民俗文化大系』小学館 一九八一年 十八ページ
 - (8) 柳田國男「時代ト農政」（定本十六巻） 二七ページ
 - (9) 高木繁吉「地方史と地域づくりとの交流―柳田國男ゆかりサミットでの試み」『地方史研究』四十一―二 一九九〇年
 - (10) 平良市教育委員会編『柳田國男読本―柳田國男と宮古』一九九一年
 - (11) 柳田國男「成城の地理書」成城高等女学校編『ながれ』一九四七年 六三ページ
 - (12) 井上美子「砧村の頃」成城自治会編『砧』四二四 一九八八年
 - (13) 柳田國男「故郷七十年」（定本別巻三） 六三―六四ページ
 - (14) 柳田國男「水曜手帳」（定本三巻） 四五ページ
 - (15) 柳田國男「野草雜記」（定本二巻） 三ページ
 - (16) 柳田國男「故郷七十年」（定本別三巻） 一七一ページ
 - (17) 坪井洋文「故郷の精神誌」谷川健一編『現代と民俗―日本民俗文化大系十二』小学館 一九八六年 三〇五―三〇六ページ
 - (18) 高見寛孝「柳田國男のキタミ語源説と武蔵野の神送塚」『地名と風土』十一 二〇一七年
 - (19) 柳田國男「郷土研究と郷土教育」（定本二四巻） 九一ページ
 - (20) 柳田國男「美しき村」（定本三巻） 三二五ページ
 - (21) 中河与一「小柿の苗」（定本二十巻月報）
 - (22) 伊原宇三郎「紅梅」（定本七巻月報）
 - (23) 世田谷区教育委員会編『世田谷の地名』上・下 一九八四年・一九八九年
 - (24) 世田谷区長室編『区制五〇周年記念―世田谷、五〇年のあゆみ』一三二―一四二ページ
 - (25) 世田谷区長室編『世田谷区政概要93』一五五ページ
 - (26) 昭和六十年から平成八年にかけてテレビ東京で放映されていた世田谷区の紹介番組。
嶋田哲夫・藻谷浩介「対談『ユウカリが丘』の奇跡」藻谷浩介編『しなやかな日本列島のつくりかた』新潮社 二〇一四年
 - (27) 米山秀隆『捨てられる土地と家』ウェッジ 二〇一八年
- この他、山万のホームページも参照した。

- (28) 同右『しなやかな日本列島のつくりかた』二〇九ページ
- (29) 平凡社刊『千葉県の地名』一九九六年
- (30) 高見寛孝『柳田國男と成城・沖繩・國學院』塙書房 二〇一〇年
- (31) 昨今、「実践の民俗学」と名乗り、民俗学者による実践活動を誇る動向が見受けられるが、柳田の説く実践とは似て非なるものに過ぎない。
- (32) 山下裕作『実践の民俗学』農文協 二〇〇八年
- (33) 柳田國男『旅と故郷』（定本三巻）四六ページ
- 同じような考えは社会学者山下祐介も表明しており、柳田國男の思想は日本民俗学会外部において受け継がれているようである。
- 山下祐介『地方消滅の罨』筑摩書房 二〇一四年 二四七～二四八ページ
- また、住民参加による街づくりは各地で始まっている。柳田國男が百年前に説いた思想が花開いたわけであるが、そこに日本民俗学会の存在がないのは情けないことである。
- 松下圭一『市民自治の政策構想』朝日新聞社 一九八〇年
- 高秀秀信『横浜発住民参加の道路づくり』かなしん出版 二〇〇〇年
- 西川芳昭他編『市民参加のまちづくり』創成社 二〇〇一年
- 日本まちづくり協会編『住民参加でつくる地域の計画・まちづくり』技術書院 二〇〇二年
- 西川芳昭他編『市民参加のまちづくり事例編』創成社 二〇〇五年
- 伊佐淳他編『市民参加のまちづくり—コミュニティ・ビジネス編』創成社 二〇〇七年
- 日本建築学会編『水辺のまちづくり』技報堂出版 二〇〇八年
- 本田恭子『地域資源保全主体としての集落』農林統計協会 二〇一三年
- 福島浩彦『市民自治』デイスカヴァー・テウエンティワン 二〇一四年
- 梅津政之輔『太子堂・住民参加のまちづくり』学芸出版社 二〇一五年
- 牛島史彦『都市研究の課題について—城下町の事例を通して』『日本民俗学』一六六 四六ページ
- 千葉市でも祭りを通じたふるさと創生が行われているようだ。
- 小河健太郎『地域の文化をつくる』『都市民俗研究』八 二〇〇二年
- (35) 芹澤清人『ふるさとの名は川崎』高文研 一九九一年 一二三ページ

